

真砂秀朗の音楽が、自然の音を奏でる。

MASAGO

Walk in Beauty ~自然のままに生きる~

アメリカ南西部、アリゾナ、ニューメキシコ、ユタ、コロラドの4州が交わるフォーコーナースの土地、ナハホ族、ホビ族、プエブロ族をはじめとしたアメリカ先住民が今なお昔からの伝統文化を継承しながら生活をしている地域にある、まるで月の表面のような岩の世界「チャコキャニオン」。真砂秀朗の奏する、優しく、せつなく、暖かみのあるインディアンフルートの旋律に自然のエコー効果、ナチュラルエフェクトとでもいうべき効果がかかり、音が何十メートルも先の岩にぶつかり、四方に跳ね返り、回りはしめる。そして野生のコヨーテの遠吠えが聞こえる。チャコで単身録音したアルバム「Chaco Journey」のエピソードだ。インディアンフルートを奏でる真砂秀朗のライフスタイルも含めた有機的な「日本のCHILL OUT」を考えてみたい。

アーティスト、真砂秀朗さんと語る「日本人と音楽」。

音楽のルーツ

—真砂さんの音楽のルーツは？

「最初はフォークでギター片手にオリジナルソングを歌い、シンガーソングライター的に活動していました。フォークの第2世代で、ちょうど＜反戦＞から＜愛＞に社会の風潮が変化していった時代で、誰でも音楽ができる状況だったんですよ」

—広い意味で今のDJ文化というかテクノシーンに通ずる部分がありますね。

「その頃はみんなギターだったけど、フォークロックの世界だね。その後、ワールドミュージックと呼ばれる世界的なムーヴメントが日本でも起こった80年代、僕はアフリカの太鼓を叩きまくった。ダブを通してアフリカンビートですね、ボブマーレーやキング・サニー・アデとか。ワールドミュージックのコンサートで主に西アフリカのアーティストと出会って、彼らから太鼓を譲り受けてたり、スタジオでセッションするためにリズムの叩き方を教わったり、アフリカやインドなどの民族音楽のオリジネーターが来日する度にスタジオでセッションをしていました」

—世界との交流があったのですね。今でこそインターネットで世界中の音楽情報を容易に手に入れることができますが。

「友だちがアフリカンアートとか工芸品を買い付けて、輸入していたんですよ。彼も太鼓を叩く、海外に行く度にいろいろな楽器の弾きかたを習ってきて僕たちに教えてくれる。たとえばジンベという打楽器で西アフリカのリズムをこの辺の海の家とかビーチで再現するんです。アンサンブルはジンベ3台のドゥムドゥム1台とか」

—今、若い人たちもクラブでジンベとか叩いてますよね。

「当時は日本に数台しかなかった。ほとんどみんな知らなかったですね。ジンベ・アンサンブルをつくって随分苦労してたよ。86、7年かな」

民族楽器について

クラブシーンで民族楽器が注目されていますね。インディアンフルートは難しいですか？

「全然、音を出すのは簡単だよ」

—サックスなどの金管楽器は音を出すのが難しいと言われてますよね。インディアンフルートは音は簡単に出るけど、奏でるのは難しい？

「それはホントに人それぞれだから、その人なりの世界が出てくるから」

—そういうのって面白いですね。

「横笛は音を出すまでが大変じゃない？ 音を出すのが大変な楽器は逆に言うと、楽器的な世界というのがあるじゃない」

—そうですね。ちゃんと奏法があつたりしますよね。その人がどうかじゃなくて、テクニクというか。

「ある程度なら、誰でも楽器が持っている音色と世界感を出せる。シンプルなもの程、それを演奏する人の世界を表現しやすいからね」

—それはDJの感覚と似てる気がします。レコードなんて同じレコードを誰でも買えるじゃないですか。でもそれぞれDJによって同じ曲でもかけ方次第で、聴こえ方、伝わり方が違ってくると思います。想像なのですが、昔、原始人が木を叩いて音を出したりとか、別に誰でも木を叩くことはできますよね。初めから笛を作ってすごいことをしようとか、何オクターブも出る笛を作ろうと思ってつくったんじゃないですもんね。あ、これきれいな音だな、みんなで吹いてみよう。みんなの中で上手に吹ける人がいて、じゃあその人に吹いてもらおうという。

「うん。今の音楽シーンはそういう方向性に、民族音楽的な原点に回帰しているのかもね」

ワールドミュージック

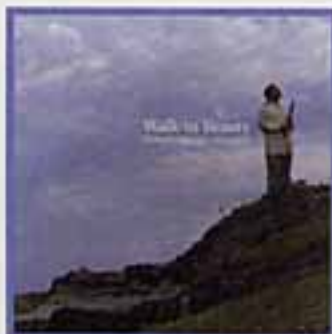
—そうですね。ところで今後の真砂さんの「ワールドミュージック」についてお聞かせ下さい。

「若い頃にインドネシアのバリでショックを受けました。それが今のビジョンに影響を与えています。普通の生活者である百姓をしている人が、夕方になると村の広場や寺院でガムランオーケストラを組んで演奏する。その日常のままで、そういう普通の人たちが世界ツアーに出かけて演奏するじゃないですか。普遍的な音楽のスタイルが自然にできあがっていることに感心しました。最近気が付

くと自分もそういう生活を送っているように思います。ただし、より発展したヴァージョンになっていると思う。＜自然(動植物)＞と＜音楽＞と＜世界とつながるコミュニケーション＞がそれぞれ発展している」

—どのような発展ですか？

「僕はインディアンフルートやバンスリ(竹の横笛)をただ吹くだけじゃなくエフェクターも使います。自分の音というのは生音をエフェクターに通しての音。だから民族楽器だけでやっている感じではないんです。しかも精神的にも民族音楽をやっているというアイデンティティーではないですね。インディアンフルートは、彼ら(インディアン)なりに音色だけを追求したんだと思う。インディアンフルートは1人が2人聴けば十分だからこそ、1オクターブちょっとの狭く限られた音域の中で、音色だけは最大限の工夫がなされた。逆にヨーロッパ人は金管楽器のヴォリュームの大きさを追求し、コロシム級の広い場所でたくさんの人に聴かせるために進化した。ヨーロッパ的な発展の結果、フルートは3オクターブ出すことができるけど、一つひとつの音色は捨てる感じがするんです。笛は素材が金属になることでオクターブが増え、ヴォリュームレベルも上がったけれど、音色は木製が優る。最終的な目的の違いであるし、ちょっと乱暴にいうと、西洋と東洋の美意識の違いであるしね。僕の場合は主にインディアンフルートとインドのバンスリ(竹の横笛の一種)という楽器をプレイします。たとえばパーカッションはもともとアフリカが原点だけど、ラテンの国に入りスペイン系のヨーロッパ人の影響を受け合理化した。皮が厚くなって、倍音を捨てるけど、大きい音が出るようになる。そして「ボン」と「ズン」と「カン」と3音を分けて弾く楽器になったんです。だけどジンベは1個で3音出すんです。「ズン」「コッ」「カッ」って。たとえば「カッ」ってやった時に、何オクターブも全部出てるわけです。出てる音の一部分が強調されて出てきてるだけで、倍音が全部入ってる。裸足の方がいいという世界なんだよね。チャコキャニオンで録音した音(アルバム「Chaco Journey」)は、耳には聴こえていないけど低周波がスピーカーで鳴っているんだよね。アナログは初めから無音がないけど、CDは周波数帯域をカットしなければ低周波の気持ち良い部分が再現できるんだ」



「Walk in Beauty」 Hideaki Masago Selection

内なる自然が微笑みかける。どんな形にもとらわれることなく、自分が美しいと思える道を選んでいこうと。
DLCI-2006 税込 ¥2,940(税抜価格¥2,800) 発売中

1. 月の足跡 (Chaco Journeyより)
2. ユメノクニ (Amazing Blueより)
3. Jungle Joy (Planet Loveより)
4. 緑のまほろばで (Colors in the Windより)
5. Colors in the Wind (Colors in the Windより)
6. Sunrise Song (live)
7. 星の海 (live)
8. ウルチム(若夏)の波 (真南風より)
9. Plant Love (Planet Loveより)



「mother earth」

真摯に自らのスタイルを追い続けてきた本物のアーティスト達が、今、ここに集って通しに満ちた音楽の数々。ピアノ、ストリングス、胡弓、インディアンフルート、沖縄の三線、アフリカのハーブ「コラ」などの様々な楽器を深い、祈りに満ちた歌で揺られる地球のハーモニー。
DLCI-2005 税込 ¥2,940(税抜価格¥2,800) 発売中

1. 遥か地球を離れて/ワン・ウィーン・ツァン
2. 夜間飛行/TINGARA
3. 星めぐりのウタ/えま&慧琴
4. 月の足跡/真砂秀朗
5. おぼくりーええうみ/朝崎郁恵&高橋全
6. 彷徨いの果てに/川岸宏吉
7. KAZE/Ikuo
8. Coldwater creed/武藤祐生
9. 黄昏のプレリュード/神山純一

CHILL1 蕎麦

神奈川県葉山町、一色海岸。都内からは電車で1時間強。葉山に住んで20年になる真砂さん。「葉山にはね、都会的な文化と田舎的な自然の両方があるね。ひな形的な場所と言えるんじゃないかな…」自生している自然の植物には良いヴァイブレーションがある。自然と都会が調和する快適で心地よい場所だ。「一色蕎麦」という地元では有名なお蕎麦屋に案内していただきました。「蕎麦屋は本来、酒を飲むところだよ」と真砂さん。すごく美味しい。



CHILL4 義景大明神・棚田

「お寺で1年に1度コンサートがあるんです。それに出演した時に裏の田んぼをやらないかと言われたのがきっかけで」。完全自給自足とまではいかないまでも、家族が1年間食べる分の米は収穫できるという。大きさは約210坪=7畝(せ)ある。「昨日も100杯水やったんだよね」と水田に生い茂る緑米(みどりまい)を眺めながら一息つく真砂さん。谷田とか棚田と呼ばれ、古来、縄文時代から行われている日本の伝統的な稲作法。山からの水と養分だけで作られている完全有機栽培だ。ちなみに上の水田は年輩者、下は若者たちののだそう。「ドレドの若者が太鼓叩きながらやってるよ」。



CHILL2 松林

「蕎麦を食べたらこの辺りを散歩します」海岸沿いを歩いていると松林がある。「どの松が好きですか?」と真砂さん。「インディアンはね、病気をしたり、身体の調子が悪いと松にもたれかかるんです」。これはインディアンのメディテーションの一つ。松の木の前で病気を治すという。インディアンは自然と折り合いを付けることで安心感、楽しさを得る。つまり自然との調和、生命と生命が融合することだ。「自分が気になる木を見つけてみて下さい。そうやって自分自身で自然と向き合えるきっかけをつくると、木と人間の間に生き物同士の意識の交流が生まれます」。



CHILL5 カフェ

田植えの後はカフェでくつろぐことも。その名も「茶屋」というお店。お勤めのオリジナルカクテル「タンバリン・ダンス」、メロン風味でおいしい。マリナーに望む絶景のオープンテラスから海を眺める。ヨットが浮かんでいる、カモメが飛んでいる。「20年前かな、森戸海岸で海の家(OASIS)をやっていた。5、6年間はやったかな。旅から帰ってきた人々が集まってきて、それぞれ持ち寄った音楽や楽器で演奏してた」そういうコミュニケーションができる場所が、そんな前からも存在していたのだ。



CHILL3 竜脈

ワニみたいな竜脈、堅い岩盤の上。森戸神社もその上に建っている。「土地にはね、ケカレチとイヤシロチというのがあってね…」この場所でアルバム「Walk in Beauty」のジャケットが撮影された。天候が良い日には右手に三浦半島、そして富士山が浮かび上がるという。夕刻、6~7時のサンセットがベスト。海岸の石を眺めながら「幼稚園かその前の子どもの石遊び、すごく良いレイアウトをするじゃない?音楽も一緒」と。自然に行動すること自体がすなわちクリエイティブすることなのかもしれない。



CHILL6 インディアンフルート

真砂さんの御自宅でインディアンフルートの演奏を聴くことができた。夕刻の涼風が窓から入り、小川のせせらぎ、蝉の声がアンサンブルに加わる。本当に美しい音色だ。旋律はもの悲しくせつないのに、暖かみがある。なにも考えずにゆっくりと目を閉じると一色海岸の風景が浮かんできた。20年くらいかけて集めた楽器、プガラブー(コンガのルーツ)などの太鼓、ティンクレック(竹木琴)、カリンバ、バンスリ(竹の横笛)そしてインディアンフルート。



日本人のルーツを、自らのルーツを探究しつつ、葉山でオーガニックな生活を送り、新しいテクノロジーとネイティブミュージックを融合させ昇華させる。今後のダンスシーンとのコラボレーションなどにも期待が高まる。先日8/11、海の家「Blue Moon」で開催されたライブでは、ギター奏者の遠藤晶美さんも参加し、アマゾンの使者、Walderedo de Oliveira(from Brazil)がライブペインティングをおこなった。演奏が始まる、カリンバの音色が響きわたる。ビーチからは波の音がする。ステージの背後の数メートル四方の大きな無地のキャンバスにブルー、ブラウン、レッド、グリーンの色が塗られていく。音につられてからだは揺れ、しばらく目を閉じる。ふと目を開けるとペインティングになにかたちが浮かび上がっている。また目を閉じる。波の音。ふと目をあけるとキャンバスにはアマゾンの海とそれを覆うように人間の顔が浮かび上がってきた。音とネイチャーサウンドとペインティングの絶妙なループがくり返される、今までにないすばらしいライブでした。この夏の思い出となりました。



■ 真砂秀朗(まさごひであき)

世界各地のネイティブカルチャーへの旅の中で出会った楽器を演奏しつつ独自の音楽を創作し、同時にヴィジュアルアートの分野でも活動をしている。92年チャコキャニオンをはじめアメリカ南西部への旅の中で深い感銘を受けインディアンフルートを中心にした活動を開始。気持ちよい波動が伝わる絵や音を通してのアーティスト活動を行っている。
<http://www.awa-muse.com>



——単純な合理化って良くないですね。

「テクノロジーの使われ方だね。実はアナログとデジタルは非常に相性が良い。全然違う物同士が融合することでお互いに生かされる。男と女のように。陰陽っていう両極があって初めて生かされていくと思う。だからデジタルのハードでデジタルの音を作ってるっていうのが一番好きじゃないんだよね。だから民族音楽だけをどっぷりというのも良いとは思えない。LPの時代にはやっぱりノイズがあるから、民族楽器の音がノイズに聴こえてくる部分があるわけですよ。民族楽器の音ってすごくノイズが入ってるから。CDになった時にこれはいけると思ったのが、無音があるということ。アナログの音が浮き出てくる。つまりデジタルはアナログの楽器を再生するのにすごく適してると思った」

——アナログが自然でデジタルが都会性となると、葉山に住むことと同じですね。ところでワールドミュージックについてお聞きしたいのですが。

「インディアン、インドネシア人、アフリカ人でも、クリエイティブな人たちが、僕らと同じ世代のアフリカだとセネガルの世界的な打楽器奏者ドゥドゥンジャエローズといった最初のワールドミュージックの人たちは、セネガルならセネガルという国ができて、以前の村と村の関係から一つの国家という体制になった時に、セネガルの国立舞踏団をつくったり、国内のリズムを体系化する政策に取り込まれていった。村々のリズムを集めて、いろんなリズムを集約して一つのオーケストラとしてエンターテインメントをつくるわけです。そしてヨーロッパ人のマネージャーがついて、プロデューサーがついて、世界に売ったのがワールドミュージックなんです。普通の村の人は、5、6つのリズムで演奏します。生活の中だからそんなにいっぱいリズムがあるわけではないですね。そういった村々の地域特性豊かないろいろなリズムを編集することによって、エンターテインメント性も増し、ワールドミュージックというジャンルができたんです」

次世代のワールドミュージック

——それが仮にワールドミュージックの第1次革命だとすると次なる動きは？

「ドゥドゥンとかファラフィナの次の世代になると、今言ったようにテクノロジーと組み合わせることがすごく自然になってくる。民族音楽だけで暮らしていく世代じゃなくなっている」

——世界中でばらばらに存在していた民族音楽はワールドミュージックという世界共通のフォーマットに変換され、他の民族や国の人々と、まるでブルースのセッションをするように、コラボレートできる環境ができたわけですね。

「そうだね。その80年代にドゥドゥンジャエローズなどによって近代化されたといえる。だからインディアンの人たちでも、僕らの下の世代なら、昔のバッファローを追う時の歌やコーンを潰す時の歌などの、生活だけに根ざしたのではなくて、ワールドミュージックのフィルターを通して、体系化したものを持っているわけですね。だからインディアンの人たちと、インプロビゼーションでセッションできちゃうわけ。同じ音楽的土壌を持っているという。だから僕は厳密に言うと民族音楽をやっているわけじゃないんだ」

日本人のアイデンティティとアンビエント性について

——なるほどですね。では日本のヒーリング系のシーンについて、僕的には広くチルアウトミュージックと解釈していますが、どう思われます？

「ベンタニック感だね。ジャズ的な世界。インディアンフルートとかできちゃう」

——つまり叙情的な要素、泣きの世界ですね。それは僕ら日本の土壌的な部分に関係があるんでしょうか？

「そう。日本人のアイデンティティは見えにくい。一見ないようにも見える。余りにははっきりしてないから。だけどすごくある」

——はっきりしていないというのがアイデンティティですかね？

「なんでも入る器みたいなものが、アイデンティティだと思うけどね」

——何でも受け入れて、あまり否定しないですね。

「それが日本の中にある縄文性だと思う」

縄文性

——縄文性？

「縄文人の時代というのはすごく長いでしょ。2~3万年あったんです。もしそういう器がなかったら、たとえば中国文化が来たら、とりあえず中国文化になり、それが破壊されてアメリカの文化が来たらアメリカの文化になる。そしてまた破壊されて…。大陸にある国はだいたいそういう風に完全に塗り替えられる。日本にはなんでも入る器、融合できる器があるんですよ。みんなの中にあるこの縄文性が僕たちのアイデンティティだということに気付くと、日本人は本当に精神的にアップライジングできると思う。そこに到達するまでの過渡期を今、神社とかそういう一つの形の中でまとめようとしている。縄文時代には神社や寺はない。でもその分すごいスピリットを持っていたと思うんだよね」

——そうですね。縄文時代はより土着の、自然に根ざした、シャーマニズムの文化ですね。

「それに日本語そのものが他の大陸の言語と比べてると面白い。主語がなくて話してるでしょ。英語と比較すると、たとえばお財布が盗まれた時に、"Somebody has stolen my wallet." (誰かが私の財布を盗んだ)という言い方をするでしょ。だけど日本語の場合だと、「財布がとられた」というでしょ。状況を語っているんだよね。つまり言葉自体がアンビエントなんです。主語付けちゃうと、アンビエントじゃなくて誰かが何をやったっていう世界になっちゃう。そういう風にとらえてないんだよね。受け身に見えるんだけど、いわゆる受け身で受け身なわけじゃない。もっと自然みたいな心地よさとして、受け身に見えるメンタリティーが僕たちのアイデンティティだと思うんだよね。日本語自体がそういう言葉だから、インディアンともすごく共通している。インディアンはすごくアンビエントだよ。「話さないで黙っている方が美」という価値観は日本にもある「男は黙ってる方が良い」と同じでしょ。共通の美意識を持っている。彼らの美意識においても黙って分かり合う方が美しい」

——不作為の作為っていうか、何もしていないという状況が何かをしているというか。

「そうだね。無という言葉に尽きるね」

Gallery "Inter Natural Garden" PLANT'S

心地よい衣・食・住をテーマに自然と調和して楽しく生活するナチュラルライフスタイルを提案する「PLANT'S」。ペトログリフと呼ばれる新石器人の描いた岩絵をモチーフにしたシルクスクリーン等、真砂さんのヴィジュアルアート作品を展示中。また「PLANT'S」ではNEW ALBUMと同名の「Walk in Beauty」と題されたギャラリーコンサートが9/1(土)7:00より開催されます。真砂さんの新作シルクスクリーンに囲まれながらのギャラリーコンサートでは、ナチュラルハーモニー代表の河名秀朗さんとの対談や遠藤晶美さんとのインディアンフルートコンサートを予定。詳細はAWA MUSEのウェブサイトをチェックしよう！

【期間】9月9日(日)まで開催中/11:00~20:00 ※月曜定休 【場所】横浜市青葉区荏田西1-3-3
【お問い合わせ】045-910-1246

